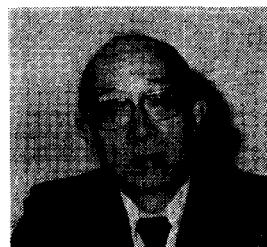


生涯学習と放送大学

放送大学 副学長 小林 靖雄



今日「生涯学習」という言葉がさかんに使われている。たとえば臨時教育審議会（臨教審）は、この4月末に第2次答申を出したが、21世紀に向けたわが国の教育改革の柱に、教育の「生涯学習体系への移行」をおこうとしている。しかしこれは大変重要なことであるが、同時にきわめてむずかしい課題なのである。

今日までのわが国の教育制度全体が、第二次大戦後においても、6・3・3・4制の学校教育にみられるように、国民全体が半ば強制的にこの制度のなかに押し込まれ、社会もこの路線をはずれた人を、何か脱落者のように扱うことが慣習となってきたからである。

しかし、このきわめて画一的で固定的な学校教育が、個性を見失った、創作力に乏しい、学問に対する情熱をもたないのみでなく、自分自身の行動に自信も責任ももてない多数の青年を育ててきたことは、ほぼ疑いのない事実であろう。また社会が、人間をその能力によって評価をせず、学歴、それも序列化された学校の出身であるということだけで評価をする慣習をつくり上げてきたことも、事実である。

生涯学習は、人間がその一生のあいだに、それぞれ各様の段階で各様の学習に対するニーズをもち、それを充足しようとして行なう学習を意味する。それは今日までの学校における学習と比べて、まず第1に自己責任的であり、かつ個性的であり、第2にきわめて多様な内容をもち、過去の学歴などは問題にならない点に特徴をもつ。要は個人のもつ学習ニーズの自覚と、それを満たそうとする熱意に依存しているのである。

今日多くの職業人は、いちじるしい技術の進歩、情報化社会の進展、国民の需要の多様化等々が進むなかで、みずから新しい時代の要求に適応させるべく、新しい学習の必要を感じているのであろう。もちろん大企業では、そのような適応能力をつけるため、企業内での教育・訓練を制度化して行なう所が多いが、それはすべての

規模の企業で可能なわけではない。

また家庭の婦人も、パートその他で働くことも多く、毎日の忙しい生活のなかで、少しでも新しいニーズを満足させるべく、何かを学習したいという意欲がつよい。しかしこれを学校に通学して満たすことはそう容易なことではないであろう。

放送大学は、このような社会人の生涯学習を、テレビとラジオの電波をフルに活用し、高等教育レベルで可能にしようとして、昭和60年4月から授業を開始した。昭和60年4月の入学者は合計17,000人強で、年齢は18歳から90歳におよび、男女はほぼ半々であった。なお30歳代から50歳代までで全体の65%を占めた。

その職業別の内訳は、

会社員が約36%、公務員が約13%、教員が約9%、個人営業者・自由業者が約7%で、職業人合計は65%となり、残りのうち約30%が家庭婦人であった。まず所期の目的である一般社会人の生涯学習の大学として出発できたわけである。

学生の種別は4つある。第1に全科履修生で、6つの専門分野のうちの1つを、4年以上体系的に学習して教養学士が与えられるもので、学生数で全体の48%を占めた。第2に選科履修生は、ある分野の科目群を1年間学習する学生で約35%、第3に科目履修生で、1学期間だけ学習する学生で約10%であった。残り約7%が特修生といい、高等学校教育をうけていない人で、将来全科履修生になりたい人たちが入学している。

生涯学習大学でありながら全科履修生を設けているのは、本来「教養学士号」をうることを第1目的としたものではなく、あくまである専門分野の体系的学習をした結果、学士号まで与えられるということである。それは個人のニーズに応じてある専門分野を選択し、たんに知識をつめ込むのではなく、基礎的な能力を十分に充実さ

せることが目的でなければならない。

この全科履修生の在学年限が10年と長期に延長されているのもそのためである。生涯学習の大学としては、むしろ選科履修生や科目履修生のほうが本来のものではないかと考えられる。

職業人が多く学習している専門分野は、「社会と経済」と「産業と技術」の2つの専攻の分野であろう。「社会と経済」の専攻は、政治学・経済学・法学・社会学等の諸学問分野にわたる。「産業と技術」の専攻は、産業論・経営学・基礎工学の諸学問分野にわたる。そこにはOR、情報工学、システム工学等の科目も含まれている。これらの2専攻には短期大学や4年制学部卒業者も多く入学している。それは職業についてから再び学習をするために入学してきたものと思われる。

昭和61年4月に、さらに新しい学生が入学した。それを含めて今日総学生数は17,200名となった。そのうち全科履修生が60%となる。これは第1年目に予定以上に全科履修生が入学し、その90%の人が持続して第2年目になったからである。全科履修生で1年間の学習で退学した人は10%であった。これは一般に通信制大学での退学率よりはるかに低い率である。

ところで、すでに一部は新聞等にも公表されたことであるが、学生の学習状況は大変よいようである。全体としてみて、科目登録者の延人数のうち約55%から60%の人が各学期末の単位認定試験をうけ、そのうち約50%の人が合格して単位の認定をうけた。それも、20代の若い人より、30代以上の人のほうが合格率が高いのである。1人平均の合格単位数は1学期6単位であり、全科履修生は平均7.5単位と高かった。なかには1学期で29単位もとった人もいた。平均でみていけば、全科履修生は6年間位で卒業できることとなる。入学試験をまったく行っていない人たちがであり、大変な努力であることがわかる。

ただ、最近感ずる若干の問題がある。先にも述べたように、放送大学にとって全科履修生という制度は、日本の学歴社会の実情を考慮し、たんに4年間以上にわたって体系的な能力の獲得につとめたということだけではなく、学士号を授与するということであり、生涯学習機関として学校教育と若干妥協をした制度であると考えるのであるが、しかし学生のほうでは、いちど入学してしまおうと、「能力の充実よりは早く卒業したい」ということになり、試験には低い点でもよいから合格したいという気風が出つつあるようである。学習不十分でも試験をうける。したがって山をかける。それがはずれると「試験問題がむずかしすぎる」といった文句をいってくる。学習の環境がきわめてきびしいことを考えると同情すべきところもあるが、しかし、自分で進んで勉学をしたいと考え、入学をしてきた人たちであると思うと、矛盾を感じざるをえない。

また放送大学は、あくまで高等教育レベルの生涯学習機関であり、その内容は広い教養学習であるため、特定の専門分野について突込んだ学習をするには必ずしも十分でない点がある。特に理工系の学問分野における学習で、実験・実習をとまなうべきものなどは、学習センターの面接授業で限られた時間と設備で基礎的学習をできるよう努力しているが、不十分である。これは当面やむをえないことであろう。

とにかく、南関東地区という限られた地域ではあるが電波を活用した生涯学習大学が出発したことは、わが国の教育上画期的なことであると思う。特に職業人には、本当に生涯学習の目的・意義を十分認識し、放送大学での学習を活用してもらいたい。そして従来までの伝統的大学も、次第に生涯学習のためにその門戸を開いてきつつあるので、放送大学の足らざる所を補い、大いにわが国の高等教育の質的方向転換をはかってもらいたいと念願している。

× × × × × ×